

吉田 晶徳さん

今月は、「こんな素晴らしい景観はどこにもないですよ。」と語る浅間牧場の場長吉田さんです。牧場への赴任は今回で三度目。きっと畜産にご縁のある家の育ちかと思ったら大間違いでした。

実家は高崎の街中育ち。生物学者になる夢を持って進んだ大学時代の時に転機が訪れた、と笑って話す吉田さん。学内で見かけた豚に惹かれて寝食を共にしたことから産業動物獣医師への道を選択、同郷の友人と一緒に県庁に入って畜産畑を歩んできました。就職時、スーツ姿だけで入庁式に出席したら、会場からそのまま浅間牧場に連れてこられ、なんの用意もないまま、翌日から一週間牧場の作業服と長靴を借りて働くことに。慌てた赴任地生活を振り返り、それも楽しい思い出だったとか。

二度目はH16年に係長としての着任でした。女性活躍の時代になって、牧場に初めての女性職員2人と赴任、作業環境はもちろん、更衣室からトイレ、浴室に到る生活環境まで、職場の大変革がありました。女性ならではのきめ細やかさと勤勉さ、技術力の高さもあって職場の雰囲気が大きく変わったといえます。

昨年春、牧場長として三度目の着任。現場の女性職員が3人に増え、総勢21人の職員で、放牧期には県内の酪農家から預かった500頭余の乳用子牛の育成・繁殖管理を共同作業で行っているそうです。今後の展望をお聞きしたところ、「育成牛の預託希望が増加していることから現在、新牛舎建設を行っており、通年を通して600頭を受託できる体制を整備しています。」と発展的なお言葉。また、「2年ほど前から牧場内を散策できる遊歩道の整備が進み、利用者の皆様から大変好評をいただいています。

昨年コース内のトイレも完成し一段と散策しやすくなりました。風で波打つ牧草の海、まるでアニメの世界にいるような気持ちになれるこの景観を体験しにきて下さい。目指せ聖地巡礼。」と、アナウンスしておりました。



「上毛かるたの誕生」と長野原町
浅間山ジオパーク推進協議会 運営委員

浦野 安孫氏

誕生73年目を迎えた「上毛かるた」の「生みの親：浦野匡彦」が、満州国官吏の任務を終え、家族8人日本に辿り着き、長野原町を目指したのは敗戦の翌年だった。途中目にした被爆地広島や戦災地東京の惨状は凄まじく、日本国の再起不能さえ感じたと言う。

長旅の終りに故郷が近くなると、丸岩や王城山が、さらには兄姉妹親族村人らが温かく出迎え、「故郷はありがたきかな」を実感したと言う。故郷の山々や人々の温かい心に触れ、戦後処理への意欲、郷土や祖国復興への「熱き思い」が湧き上がって来たと言う。

その年、戦争犠牲者の相互扶助を目的に組織された現在の各種福祉団体の母体となる「同胞援護会」の運営を知事から任された匡彦は、群馬の子供らが遊びを通して郷土を学び、「郷土愛や夢、希望」を育くむための「上毛かるた」の制作に取りかかる事となる。

読み札のテーマを公募、編集委員会を立ち上げ、新しい時代にふさわしい民主的な手続きを踏み、「子供に未来を！」をテーマに、構想から1年足らずで上毛かるたを完成させている。今年はコロナ禍で中止されたが、上毛かるた競技大会も続けられている。上毛かるたは、故郷の美しい山河や県民の協力があって誕生した、「群馬が誇る文化遺産」だ。

匡彦叔父の御霊は、生家と丸岩が良く見え、春には福寿草が、秋には曼珠沙華の花咲く「お塚」に眠る。お塚の目の前には今春、「やんば天明泥流ミュージアム」が開館となり、直ぐ隣の旧第一小学校校舎の一角には、「上毛かるたコーナー」も設けられると言う。

浅間火山の歴史と共に「上毛かるたの歴史」にも触れて頂けるとありがたい。



ジオ活動報告

2021年2月5日(金)に日本ジオパーク委員会において今年度日本ジオパークネットワーク再認定対象地域の審査がなされ、お蔭様で無事再認定をいただくことができました。今後も様々な取り組みを行ってまいります。

祝！再認定

ガイドの受付しています

「浅間山北麓ジオパークガイドの会」の認定ガイドによる案内の受付をしております。ご希望の方は、左記、推進協議会事務局までお申し込みください。

【料金表：ジオガイド1人あたり】

半日¥5,000~8,000	ジオガイド1人につき
1日¥10,000~16,000	15名位までガイド可

▲1/14(木)・16(土)に万座プリンスホテルにて「スノーシューガイド研修会」が行われました。

▲1/19(火)に万座温泉カラマツ母樹林案内人養成講座研修会が行われ、22名が参加されました。午前中は座学、午後はフィールドで実施されました。

発行：浅間山ジオパーク推進協議会
Mt. Asama Geopark Promotion Council
制作担当：広報・観光委員会

〒377-1524 群馬県吾妻郡嬭恋村大字鎌原494-45
TEL/FAX：0279-82-5566
URL：www.mtasama.com
E-mail：asama-geo@ebony.plala.or.jp
Facebook：www.facebook.com/asamageopark

編集後記

今回は、春先まで楽しめるスノーシューを中心にお届けしています。編集の中に、浅間山北麓ジオパークの「再認定」を頂きました。これもひとえに皆様のお力の賜物と心より感謝しています。



あさまびと

特集 あさまの春を楽しむ



▲頂上まであともう少し！

やんば天明泥流ミュージアムが2021年4月にグランドオープン！



▲やんば天明泥流ミュージアムが4月3日(土)にオープンします。ぜひ足をお運び下さいませ！(特集ページにも掲載しています。)

【開館時間】午前9時~午後4時30分(入館4時迄)
【休館日】水(水が祝日・振替休日の場合その翌日)/年末年始【観覧料】一般600円(500円)小中学生400円(300円)*0は15名以上の団体割引*長野原町民及び未就学児無料*障害者手帳などをお持ちの方とその介護者(1名)は半額【お問合せ】0279-82-5150
【HP】www.town.naganohara.gunma.jp/www/yamba-museum/

再認定されました！

四年ごとに活動状況の審査がおこなわれるジオパーク。当該ジオパークは審査の結果、良好な活動状況が認められて、再認定されました。皆様のご支援、ご協力に感謝いたします。これからもどうぞよろしくお願い致します。

春とはいえ、まだ寒い浅間高原。山間部には雪が多く残っています。更に、コロナの影響で不要不急の外出は避けたいもの。その様な時でも、コロナ対策をしっかりとって、外の新鮮な空気を体一杯に取り入れることは大切です。お散歩の代わりにスノーシューを履いて雪原を歩くことは、適度な運動とストレス解消に最適で、一番景色の良さそうな所でコーヒーでも沸かして飲むのは最高です。新芽が膨らむこの時期は視界も良く、夏場では見ることができない絶景を堪能でき、草木をみると、春の到来を感じさせてくれます。活発になった動物の様子を伺えるのも、この時期ならではの楽しみです。

浅間山北麓ジオパーク

あさまの春。自然の恵みに感謝して、色々体験してみよう



スノーシューとは、雪の上をラクに歩くため足に装着する道具で、いわゆる「西洋のかんじき」と言われています。春先まで楽しめ、他の季節とは違った魅力が味わえるアクティビティーです。普通のシューズでは行けないところも、ラクラク行くことができます。雪の上の動物の足跡を見つれたり、樹木の観察も楽しみのひとつです。



▲着脱は簡単！ ▲万座は一味違った解放感！

樹木の観察も楽しみのひとつ。枝の先を見よう。

木の枝で楽しむのは、芽の観察。木の芽は、とても表情豊かなのです。

木の芽は、冬の間、木の幹に抱きついて、冬を越すのを待っています。

木の芽は、冬の間、木の幹に抱きついて、冬を越すのを待っています。

木の芽は、冬の間、木の幹に抱きついて、冬を越すのを待っています。

4月10日(土) ▲パルコール(浦倉山)はゴンドラで行ってご家族で楽しめます。

【万座母樹林スノーシュー体験会参加者募集】

万座にある天然落葉松の巨木を巡る積雪時しか入れないコースをご案内します。

【日時】2021年4月10日(土) 9:30~12:00 定員10名(対象:小学5年生以上~大人)

【集合場所】万座しぜん情報館 9:30迄に現地集合(現地解散12時頃予定 所要時間約120分)

【費用】大人1,000円 子供500円(スノーシューレンタル可 大人1,000円 子供500円別途)

*保険料込み*交通費は各自でご用意ください。(鬼押・万座ハイウェイ料金所の料金等)

【持ち物】スノーシュー、ストック、防寒靴、スパッツ、防寒着、帽子、手袋、飲み物など

【申込み】TEL0279-82-5566 浅間山ジオパーク推進協議会事務局

*定員となり次第締切らせていただきます。雪の状態およびコロナ感染拡大防止による中止の際は、HP等で早急にご案内いたします。

New Open 訪れてみよう! 「やんば天明泥流ミュージアム」



▲天明泥流展示室

やんば天明泥流ミュージアムが4月3日(土)グランドオープンします。1783(天明3)年浅間山大噴火により発生した天明泥流と泥流に呑み込まれた人々の暮らしがハツ場ダム建設に伴う発掘調査によってよみがえりました。本ミュージアムはそれらの発掘調査の成果を多くの方に知っていただくことを目的として設立されます。



アニマルトラックング

どうぶつがとおったあしあとをさがしてみよう。

りす うさぎ かもしか

Q.かもしかとしかのちがいは?

A.かもしかは、うしのなかまで、しかは、しかのなかまなんだ。かもしかは、たんどくでこうどうするのだけれど、しかは、なかまといっしょにせいかつするんだ。まだあるよ。かもしかのツノは、いっしょうはえかわらないのだけれど、しかのツノは、まいとしはえかわり、はるさきにぬけおちるんだよ。

かもしか = ニホンカモシカ (ウシ科ヤギ亜科カモシカ属)

しか = ニホンジカ (シカ科シカ属)

山林を有効活用する冬の製炭作業を訪ねて

かつては各地域で、冬場の燃料として木炭がたくさん作られていました。冬季に作業するのは、炭の元になる樹木が落葉し、水分の少ないナラの木などが良質の炭にできるからです。でも今は、ほとんど見かけなくなり、荒廃する山林が増えています。今回、鎌原地区で炭作りをしている山崎さんを訪ねて、製炭現場取材しました。炭作りは山づくりでした。

【良質な炭が出来るまでの流れ】

▲写真① ▲写真② ▲写真③ ▲写真④

- 薪の搬入**
製炭に使うおもな薪は、山で伐採したコナラの木で、一度の製炭に使用する量は軽トラックで約4台分。窯の中に用意した細い枝などを敷き、その上メインになる90cmほどに切って割ったナラの木を立て、さらに短いものをビッシリ詰めて一杯にします。半日以上かかる作業です。(写真①)
- 火入れ**
搬入作業が終わると、焚き口との間に熱が通るように壁を作り、翌日は早朝から火入れ作業が始まりました。焚きだすと、すぐにうしろの煙突から白い煙が出ました。半日強、焚口で燃やすと窯の温度も上がり、煙突からは木酢の臭いがする白い煙。ここで焚口を今度は石とカベ土で塞ぎ、わずかな空気口にします。(写真②)
- 火止め**
小さな空気口にしてから5日ほど経つと窯の温度が300°C位まで上昇して煙の色が変わるのを見て、今度は空気口と煙突を完全密閉。窯の中では炎のドラマが繰り広げられたのち、炭に変わって冷めています。(写真③)
- 窯出し**
密閉してから10日前後に、塞がれていた焚口を崩して、いよいよ中の炭出し作業です。半日かけて取り出した炭の量は袋にして、約45俵ほどでした。窯が冷めないうちに、午後からはまた、用意された次の材料を窯に搬入です。こうして、山の管理とともに自然エネルギーに再生されるのが炭焼き作業です。(写真④)

※ひとくちメモ
信州街道で栄えていた時代、この地域では炭が貴重な現金収入になりました。炭1俵はカヤ俵に比べて重さ4貫(15kg)。これを馬に乗せ、1駄(炭の場合6俵)を運んでいます。商人のように販売することを控えたために、農民は運送賃とか駄賃としてお金を頂きました。いまでも言う「駄賃」のはじまりです。薪炭は農村経済を大きく支えていました。